

## 舞台発表を通しての「気づき」(その2)

— 保育内容を意識することをめざして —

大 岩 みちの・妹 尾 美智子・本 山 益 子

**要 旨** 保育内容総合の授業における学生の活動経験や獲得した力を「保育実践力」の向上につなげることを目的とし、学生への授業活動振り返りのアンケート記録から保育内容への意識の明確化を図ることを試みた。幼児教育学科第一部2年生の学生に対して、毎授業後、取り組みについての記録を課すことによって、保育内容総合の授業活動を保育内容と重ね合わせてみようとする姿勢が培われていった。さらに、保育内容総合の授業活動が保育実践につながっていることに気づき、保育するということイメージして、子どもの存在を意識しながら保育内容を実感していったことも明らかになった。

### abstract

To enhance the students' ability to higher power of child-care practice, their awareness of child-care contents was encouraged based on the records of their answers to questionnaires about class activities. Specifically, by having sophomores keep the records of their activities after class, they had developed their attitudes toward the adjustment of their class activities to the child-care contents. Furthermore, they noticed the relation between the class activities and the child-care practice, imaged child-care practice, and realized the child-care contents.

### 1. はじめに

私たちは、平成元年当時の学生の「表現は苦手」「表現は嫌い」などという表現活動に対する硬直した意識を和らげたいと思うと同時に、音楽・美術・身体表現という活動を楽しみながら経験することを通して、自らの表現力を向上させ自信を獲得させたいとの思いをもっていた。そして、チーム・ティーチングでの試行的な授業実践を試み、一教科(旧教科名「保育方法演習」新教科名「保育内容総合」)を立ち上げることができた。また、平成4年の本学ホール完成を契機に、その授業の成果を発表する場として、学生に舞台発表の機会を提供するようになった。

全国保育士養成協議会第38回の研究大会においては、その授業における活動を通しての学生の気づきに関して報告した。舞台発表を作り上げていく過程において学生は、表現力の向上だけではなく、自分たちで実施していく経験の中に生じてくる仲間との協力・軋轢などを通して、自律的な共働関係を経験し、企画力・運営力・人間関係力なども身につけ

ていくことに気づいていることが明らかになった。そして、その背景には、「自力でやり遂げた」という実感(達成感)と「価値ある成果」を残すことができたという自信が存在していることを報告した。このように、学生の社会性を涵養し、人間的な成長を保障する授業における活動であることは確認できたが、この授業における活動を保育実践に結びつけることが、この授業における活動の新たな課題として見えてきた。

これまでの歩みは、「教育上のねらいの深まり」として、次の図1.のようにまとめることができる。

図1. 教育上のねらいの深まり



## 2. 研究目的

授業担当者として、学生自身がつくり、演じることを楽しむだけではなく、常に子どもを意識し、保育実践へ還元していくことを学生に促してきた。しかし、学生が「保育内容総合」の授業を通して保育内容というものをより明確に意識する必要性を感じ、この授業における活動が「保育実践力」の育成につながる可能性を有しているのか否かについて検討したいと考えた。

そこで、昨年度の授業においては、授業での活動経験や獲得した力を「保育実践力」の向上につなげることをねらいとし、毎授業後、学生に領域は総合的に捉えることが前提であることを確認しながらも保育内容の5領域を観点として活動を振り返るための記録を課した。この記録の分析を通して、学生がどのようなことに気づいているのかを明らかにし、保育実践へつなげるための一基礎資料を得ることが本研究の目的である。

## 3. 研究方法

### (1) 対象学生

平成18年度に在席した岡崎女子短期大学幼児教育学科第一部2年生6クラスの内、舞台発表を選択した3クラス129名（44名・42名・43名）

### (2) 舞台発表のテーマ：「ファンタジー・ワールド」 クラス別テーマ：「くつやとこびと」 「ピーターパン」他

### (3) 授業における取組

2年次後期の「保育内容総合」の授業内で以下のように実施した。

月 日	活 動 内 容	記 録
11/6	テーマの決定・役割分担	無
11/27	台本の完成・役作り・舞台構成	有
12/4	クラス別活動	有
12/11	中間発表	有
12/18	クラス別活動	有
1/15	クラス別活動	有
1/22	リハーサル	有
1/29	クラス別活動	有
2/9	公開リハーサル	無
2/10	幼児教育祭 一日目	有
2/11	幼児教育祭 二日目	

### (4) 記録用紙

対象学生には、以下の項目について、記録用紙への記入を課した。

- ①活動に保育内容5領域が含まれる実感の程度（4段階尺度法）【非常に・まあ・あまり・全く】
- ②含まれていると感じた具体的な内容の自由記述
- ③その日学生が学んだ「保育内容」の捉え方についての自由記述

### (5) 学生の記録分析

記録分析は、以下の三点による。

- ①授業毎の保育内容の領域別平均を求め、推移を見る
- ②「子ども」と「保育実践」を視点とした記述の抽出
- ③保育内容としてふさわしい捉え方と考えられるものの抽出

## 4. 結果と考察

ほぼ毎回の授業後に記録された保育内容の5領域を観点として学生が振り返ったことを量と質の両面から検討した。

- (1) 活動に保育内容の5領域が含まれている実感の推移は、「今日の授業の中に、次の領域に関わる活動はどの程度含まれていたか？」という質問に対して、領域毎に「4. 非常に含まれていた 3. まあ含まれていた 2. あまり含まれていなかった 1. まったく含まれていなかった」の4段階の評定値の平均推移をグラフにした。次の図2. は、3クラスの平均を示したものである。

図2. 活動に5領域が含まれている実感の推移

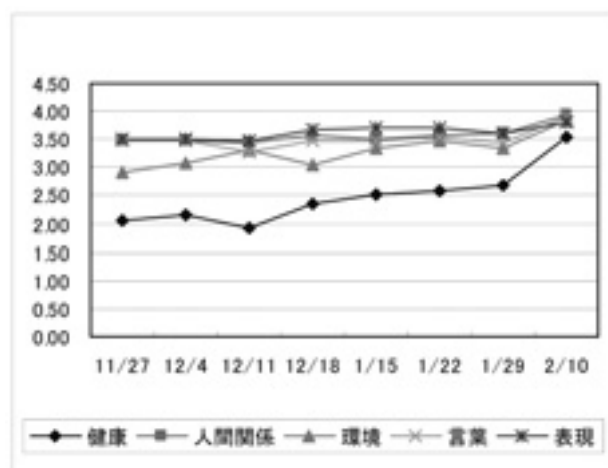


図3. から図5. は、クラス別の結果を示したものである。

図3. 保育内容総合（Aクラス）

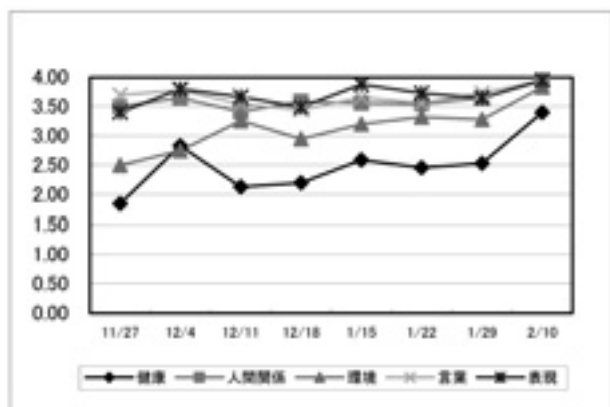


図4. 保育内容総合（Dクラス）

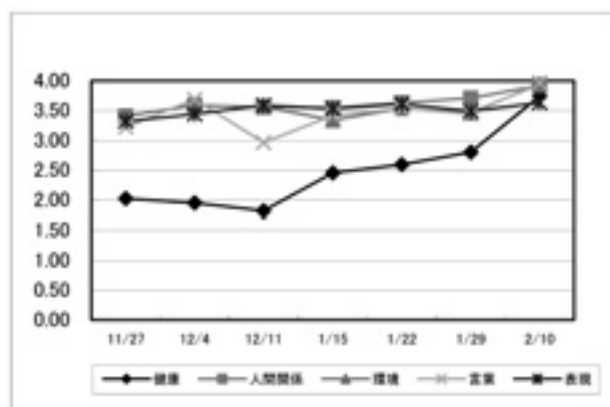


図5. 保育内容総合（Lクラス）

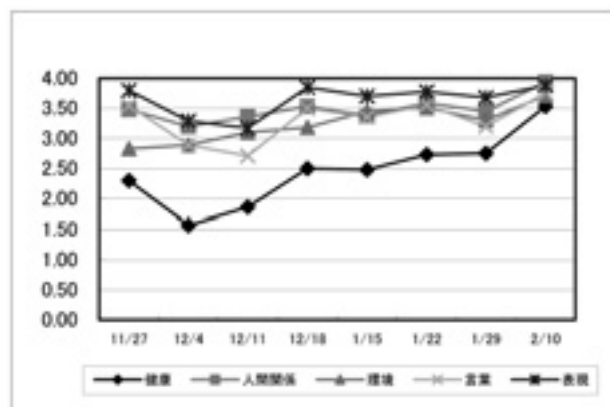


図2. が示すグラフから、「健康」領域が含まれるという実感は、最も弱いことがわかった。それに対し「人間関係」「言葉」「表現」領域が含まれているとの実感は毎回高い値を示している。しかし、どの領域も2月10日の幼児教育祭当日である本番が最高値になっており、なかでも「人間関係 (3.94)」がもっとも高く、「言葉 (3.90)」「環境 (3.83)」「表現 (3.82)」「健康 (3.55)」の順になっていた。つまり、実際に子どもを中心とした観客

の存在が、この数値の上昇をもたらしたものと考えられる。このことは、それぞれのクラスの結果からも同様の結果を得ている。

(2) 次に、保育内容5領域が含まれていると感じる具体的な活動内容の自由記述については、「子ども」や「保育」を視点とした記述を抽出したが、2月10日以外の記述には、「領域はあまり含まれていないと思った」「どのように動いていくのかを大まかに決めた」などのあいまい、あるいは的外れな表現、あるいは、自分達の行動記録に終始するものが多く見られた。そこで、最も評定値の高い2月10日の自由記述を今回の分析対象として検討した。

#### (a)「健康」について

「子ども達が戦いをする場面で、子ども達が怪我をしないように見守りながら海賊として演技ができた」をはじめとし、実際に目の前にいる子どもの安全を配慮する記述が10人に見られた。

全体の半数に当たる64人は、自分自身の体調管理に配慮して当日を迎え、そのうちの半数近くは、周りの仲間たちが健康状態に気遣っていることにも気づいていたことを記述している。中には、「前日遅くまで練習したので、みんなの健康状態が心配だった」「舞台に出ている人達と照明係、そして私たち音響係と、どれが欠けても私たちのクラスの発表は成り立たない。各自が体調管理に気をつけていた」と、体調管理ということから、クラス全体に目線が広がっている様子がうかがわれた。さらに、良い体調は良い演技をもたらすことに気づいたり、自分の役割を果たす責任感から早寝早起きに心がけたりしたことの記述があり、自分自身の健康状態が基本にあることを自覚していく姿も見られた。

また、「体を動かしたことによって、元気になった」「体が柔らかくなった」「手を抜くことなく精一杯指の先から足の先まで使って体を動かした」「一回一回を大事に思いっきり動いて、たくさん汗をかいた」など、保育の中で子ども達に体験してほしいことを自らが体験していることを実感していることがわかった。

#### (b)「人間関係」について

「子どもと楽しく関わることができた」「子どもとのかかわりを笑顔で楽しんだ」など、実際の子

どもや観客とのやりとりに関する記述が15人に見られた。中でも「お客さんと私たち、子どもと保育者、共通した部分が多くあると感じた」との記述は、この表現空間を保育空間に置き換えて考えていることがうかがわれた。

そして、「衝突することがあり、本当にみんなとの関係が大きく影響した」「私たちの人間関係が今回の劇を行うにあたって一番の課題になったことだと思う」「やはり何をするにも円満な人間関係を築くことが大切だと思った」などと、人とのかわりが基本であることに気づき、安定してこそ充実感を味わうことにつながることに理解が及んでいた。また、そのようなトラブルを乗り越えたからこそ感じる事ができた一体感や連帯感についての記述が数多く見られ、協力することの大切さに気づいている。

さらには、それぞれの役割を果たしたり、リーダーの存在に感謝したりして、この活動を進めていく中で、人とのかわりが円滑にいくことの必要性に気づく姿も浮き彫りになった。

特に保育内容人間関係につながるものとして、「しっかり話し合っていくことが重要」「言いたいことを言い合えた」「たくさんぶつかり合ったが、自分の思いを伝えて、相手のことも考えるように心がけた」「意見を出し合って話し合った」のように、自分の思いを伝えるが、相手の思いや考えに気づいて行動することが大切であることを実感していく様子も見られた。

#### (c)「環境」について

「安全な環境づくり」という物的環境に関する記述や、「観客も環境の一部であること」への気づきは、「子どもがピーターパンの世界に入り込めるように」や「子どもがびっくりワクワクするように」配慮したことを示している。つまり、保育空間と同様に、子どもの立場に立って、物的・人的環境を整えようとしていることが読み取れる。

保育環境の構成につながるものには、「大道具、小道具の配置出し入れの仕方に気を遣った」「出演者の登場の仕方や踊り方、大道具・小道具の置き場などをその場にに応じて邪魔にならないようにしたり、目立つようにしたりした」「劇が良くなるように大道具や照明を有効に使った。また、少しでも良くなるようによく話し合った」などがあった。実際の保育場面で環境構成をしたり、保育中に再構成したりしていく上で役立ててほしいと願うも

ので、半数近くの記述数であった。また、「大勢のお客さんが集まった中、緊張感に包まれて最高の環境・・・」「お客さんも入って劇をすることで普段とは違う環境・・・」「お客さんがたくさんいて、本番はすばらしい」とは、日々の保育環境にも、発表当日に感じた緊張感を忘れないでほしいと願ってやまないものである。

#### (d)「言葉」について

44人が、「子どもにわかるように」言うために、「ゆっくり」「大きな声で」「はっきりとした口調で」「一人ひとりに届くように」「心に響くような声」をポイントとして記述している。また、「アドリブの活用」や「臨機応変にセリフを言うこと」という実践についての記述もされている。これらも保育場面において求められることである。

「声をどのように出したらみんながわかるのか、とても悩んだ」「会場を巻き込むために、言葉がとても大切だと思った」「ひとつの『言葉』にはたくさんの思いがつまっているため、それをどのように伝えるかは劇だけではなく常に大切だと思った」とは、言葉が持つ本来の意味から、その発し方、大きさ、速さ、強弱など、思いを伝える手段としての言葉の理解に考えを進めていることがわかった。また、「子ども達に話しかけると嬉しそうな返事が返ってきて嬉しかった」と、子ども達とのやり取りから生まれる喜びを感じ取っている記述もあった。

#### (e)「表現」について

「表現」に関しては、「会場を巻き込む大きな演技で、自然と出てくる表現が大切」をはじめとして、「言葉で表していないことを体で表現した。私は、楽しいことを伝えたいと思った」、「ホールの全員に猫の世界を楽しんでもらおうという気持ちで表現していった」など、18人が『観客に伝えることなどを意識した』と記述している。「体調に気をつけた」「みんな元気にできた」「発声練習をした」等の記述は、観客の有無に左右されず、毎回心がけていたことが背景にあると考えられる。

22人が、はっきり「役になりきって・・・」「役になりきった」と述べ、子ども達のなりきり遊び、ふり遊び、見立て遊びの理解につながる、自分自身の幼い頃の経験を再現する場になったものと考ええる。



このように授業活動を保育内容という視点で見ようとする姿勢は、毎回積み重ねられてはいたが、幼児教育祭当日の2月10日に実際に観客である子ども達とのやり取りを体感したことにより、表現することが楽しいことに加えて、子どもたちとの双方向のやり取りの中で響きあうことの心地よさを実感したものとする。そのことは、学生が保育内容の領域について具体的に考える機会ともなった。そのように授業活動を捉えていたからこそ、数値の上昇を招いたと言える。

(3) さらに保育内容の捉え方の自由記述からは、以下のような記述が見られた。

「はじめは幼児教育祭の演技が保育内容につながるのかと少し疑問に思っていたが、今日振り返って、しっかり保育内容について学べたと思った」「はじめの頃の準備から本番までは本当に長く、色々な場面に保育内容が組み込まれると改めて思った」「その場その時によって、どの領域が重要かは変わってくるけれど、何をするにしても保育をするには、この5つ（の領域）がベースになっていると実感した」「子どもの反応を見ながら対応していくことが必要だと感じた。これが保育をしていく中でもとても大切なものだった」などの記述から、この活動経験を保育実践につなげていることがわかる。

また、「今日で最終公演となるのはさびしい」「これで終わりだという実感が持てない」「これから現場に出ても、少しくらいのことではくじけないくらい大きい物を得ることができた」という見方は、その経験や活動へのさらなる意欲を持っているという意味で保育内容における大切な視点を獲得したものと言える。

そして、「一回一回の練習を振り返り、良くしようとするのが大切」という記述は、日々の保育実践を省察し、次の日の保育内容を考えて計画を立てることが大切であるということにつながるものである。特に「良くしよう」という姿勢は、子どもに焦点が当たっていることの現れであり、これも保育内容を考える上で重要な視点である。

## 5. まとめ

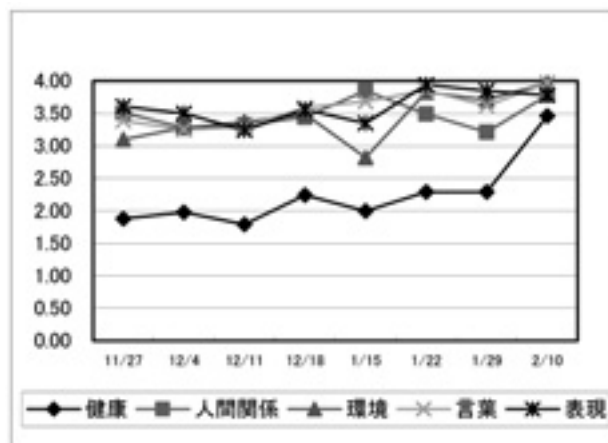
今回、舞台発表を作り上げるまでの毎回の授業において、保育内容の5領域がどの程度含まれている

かの記録を学生に課すことを試みた。毎回の記録を負担に感じる声も聞かれたことは事実だが、毎回の記録によって、「保育内容を観点として活動を振り返る」ことが定着してきたと考えることができる。つまり、毎回の記録を通して、授業活動を保育内容と重ね合わせて見ようとする姿勢が培われたともいえる。演じながらやり取りができる子どもたちの存在の実感を通して、その見目が具体的に、そして鮮明になったことが、評定値の上昇と活動内容の記述から明らかになった。すなわち学生が、毎回の授業の積み重ねにより、当日記録をすることによって振り返ることも含めて、この授業での活動が保育実践につながっていることに気づいたことを確認できたものとする。

舞台発表に学生が取り組む場合、達成感や自信のバランスが学生に満足感をもたらすということを以前に報告したが、今回の試みを通して、学生が満足することだけに終わることなく保育実践につなげていくために、一つは、保育内容を観点として活動を振り返ることの積み重ねが有効であるということが明らかになった。もう一つは、舞台発表によって子どもとのやりとりが実感できる経験をする必要があるという結論に至った。

学生が、果たして子ども達にとってふさわしい保育内容の理解に及んでいるのかどうかを測る調査方法、分析方法、特に「ふさわしいと思われる保育内容の捉え方」の定義づけについては、引き続き検討課題として考えている。

図6. 保育内容総合（Bクラス）



この舞台発表のほかに、幼児教育祭でもう一つの舞台発表の場が設けられている。扇形に近いフロアーステージを利用して、演じる側も見る側も同じ目線、間近な距離で子どもとのやり取りができるもの

である。その1クラスの学生にも今回の対象学生と同じ記録の提出を課した。(結果は、図6.に示す)発表する舞台が違うため、今回は結果に加えることはしなかった。しかしながら、子ども達の存在や子ども達とのやり取りがより「保育実践」を意識すること、そして、記録の積み重ねによって保育内容が「保育内容総合」の授業における活動と結びつくことへの学生の気づきがあったという点では、舞台発表をしたクラスと同様の結果を得ている。

今後はさらに、保育内容に対する学生の考え方が子どもにとってふさわしいものとして作用していくために、それぞれの学生の思いが、学生達全体の共通の思いとなっていくように指導を進めていくことがもう一つの課題となろう。

#### 【参考文献】

- 文部省 『幼稚園教育要領』 大蔵省印刷局 1998. 12
- 厚生省児童家庭局 『保育所保育指針』 フレーベル館 1999. 10
- 文部省 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館 1999. 6
- 森上史朗+大豆生田啓友 渡辺英則  
『新・保育講座 保育内容総論』 ミネルヴァ書房 2001. 4
- 高杉自子著 子どもと保育総合研究所編  
『子どもとともにある保育の原点』 ミネルヴァ書房 2006. 6